

こむろ なおき れきし み にほん ゆ すえ
 小室直樹著「歴史に観る日本の行く末」青春出版社 1999年2月10日刊を読む

松蔭精神の神髄

1. (1) 松蔭の学問の根幹は歴史である。彼は、野山の獄で閑暇(ひま)を得るや歴史研究に没頭した。(170頁参照)。しかし、それ以前にもそれ以後にも、松蔭は歴史に多大の関心をもって「歴史を読んで賢豪の事を観て志気を激発するに如かず」というのが松蔭の家言であった。

つまり、世界精神(英雄)のしたことをみて、やる気をおこすべきである、というのである。座座標の原点は歴史におく。
- (2) 松蔭は、どのような人にも、その人のよさを見ようとした。すべての人が見捨てた人でも、松蔭にかぎって、その人の美質を発見するのであった。
- (3) 「彼の人に接するや全心を挙げて接す、彼の人を愛するや全力を挙げて愛す」(蘇峰。前掲書。161頁)。つねに全エネルギーを結集した。行動的禁欲(aktive Askese)である。

松蔭の教育の要諦も、まさにこれである。
 この人ならこのくらし、教えておく、あの人ならあのていどに教えておく。
 松蔭は、絶対にこれをしなかった。
2. (1) 15、6才の少年(例。「品川弥二郎に与うる書」。前掲書。164頁)にも10才の童児(例。「岡田耕作に示す」同右。163頁)にも、成人に教えるのと全く同じように教えた。

(2) しかも、引照基準は世界精神であり、松蔭の観るところは、その人の長所に集中する。相手をして「その手の舞い足の踏む所を知らざらしむ」(同右。164頁)ほどに志気(やる気)を鼓舞した。

(3) 彼は往々インスピレーションのために精神的高潮に上る。「而してこれを以て他に接し、他に導いてこの高潮に達せしむ」(同右。161頁)。
3. (1) これこそ、教育のエッセンスである。

(2) 教育の奇蹟が起きた理由はまさにここにある。
 蘇峰自身「彼が教育の道多子なし」(同右。161頁)——松蔭の教育の道はこれだけである——と明言している。

(3) つまり、「ただ己が真骨頂、大本領を據べて、以て、これを他に及ぼすのみ」(同右)すなわち「自分のすべてを相手にぶつける」ことなのである。
4. (1) では、松蔭の真骨頂、大本領とは何か。

(2) 松蔭は、常に、死ぬつもりでいた。
 死ぬことの教育こそ、まさに、教育の大本領である。

(3) しかも、死の教育をなし得る者は、暁天の星よりも鮮ない。

5. (1) 松蔭は、尊敬する師の佐久間象山に手紙を書いて質問して最後に「丈夫の死所、何れの処か最も当らん」(同右。167頁)と結んでいる。
- (2) 「どこで死ぬか」これこそ、武士にとって一番大切なことである。
- (3) 青春期(思春期)の若者にとって、死は切実な問題である。
死に関する若者の気持が大人に通ずることはない。
6. (1) 例えば、『奔馬』の勲の「日の出断崖の上で、昇る日輪を拝しながら……かがやく海を見下ろしながら、けだかい松の根方で、……自刃することです」(三島。前掲。131頁)という切望を理解できる年長者は、彼の周辺には一人もいなかった。
- (2) 昭和維新の志士たる青年将校でさえも例外ではなかった。彼の恋人も理解しなかった。……いちばん理解しなかったのが彼の父であった。
「これぞと思った年長者との対話の果てに、……今の今まで光り輝いていた相手は死灰に変わる」(同右。133頁)。
- (3) ここに、松蔭の教育を理解する鍵がひそむ。
7. (1) 松蔭こそ、このような若者との対話において「死灰に変わらない」歴史にも希有の存在である。
- (2) 松蔭は、つねに死をめざしていた。松蔭の足跡にはいつもどこまでも、ついていく伴侶は“死”であった。
- (3) “死”は見つめるまでもなく、常にそこに在った(Dasein)。
8. (1) 「彼が一生は、教唆者に非ず、率先者なり」(蘇峰。前掲書。170頁)。率先躬行(自分でおこなう)こそ教育であることを松蔭は証明した。
- (2) 「彼は未だ嘗て背後より人を煽動せず、彼は毎に前に立ってこれを磨けり。彼はいわゆる己が欲する所を以て、これを人に施せしのみ。もしくはこれを人に強いしのみ」(同右)。
9. (1) 松蔭が松下村塾で子弟を教えた期間は、2年半にみたなかった。八畳の矮屋(小屋)で、その後、べつに十畳半の一室を加えたにすぎなかった(同右。172頁)。
- (2) しかも、彼の門下の一人伊藤博文は、「如今、廟廊棟梁の器、多くはこれ松門に教えを受けし人」(いまの政府のトップに居る人びとの多くは松蔭の弟子である)と詠じた。
- (3) この現象を見て、世の人は、「奇蹟の教育」と呼んだのである。(その真の理由については、171頁参照)。
10. (1) 松蔭の力等によって維新回天の業は成った。
- (2) 松蔭の教育こそ理想的教育であると人びとはあおぎ見た。
- (3) それと同時に、日本教育の転落の歴史は始まった。
11. (1) 明治維新は奇蹟的大統一であった。
しかし、実は、もうひとつの奇蹟が進行していたのであった。
- (2) 明治維新が成就するや否や、そのイデオロギーが忘れ去られたのであった。
- (3) 吉田松蔭の背後には水戸学があり、さらにその背後には、崎門の学(山崎闇齋の学)、山鹿素行の学がある。崎門の学と素行の学とは、松蔭に、直接にも大きな影響を及ぼした。

12. (1) これらの学問は、日本の国体(日本の本質。日本歴史の神秘)を明らかにし、華夷の弁(日本と外国とのちがい)を確立するために、決定的意味をもつ。
- (2) それであるにもかかわらず、明治以後、これらの学問は忘れ去られていった。
- (3) 修身、国史(日本史)、国語(日本語)の教科書において、栗山潜鋒、谷秦山、浅見綱齋等の名はどこにもない。勿論、その業績は記されていない。
- 松蔭は、抹殺されたのではない。
- が、彼の業績、偉業については、ほとんどふれられていない。
13. (1) 吉田松蔭は教科書に登場した。しかし、その登場の仕方たるや、「人をそねむな」「けんそん」「自信」などの人間関係をめぐるテーマにおいてであり、彼のイデオロギーについては、説明されていない(松本。前掲書。39～40頁)。
- (2) いわゆる「臣民教育の強化の教科書」(昭和8年より)においてすら、松蔭イデオロギーに関する説明は、何もされていない。「忠君愛国」なんていっても、すべて抽象的に述べられているだけで、ことの急所はみんな外れている。
- (3) 松蔭の真骨頂、松蔭精神の神髄、歴史における松蔭等は、教科書のどこにも見出されない。
14. (1) 松蔭が、忠君愛国の元祖であり権化(化身 incarnation)である所以は、彼が、造次顛沛(とっさのま)にも、君国のために死ぬ決意をはなさなかったからである。彼の行動はこれを目的として行動的禁欲(150頁参照)であった。
- (2) このことを如実に明示しているストーリーは教科書にひとつも見当たらない。
- (3) 下田渡海の失敗(22頁参照)。死を決して未知のアメリカで世界に識見をもとめ日本の国策を決定しようとするの志、まさに世界史的愛国者ではないか。
15. (1) 護送官や警務官、刑務署長までも心酔させた死刑囚。教育の奇蹟の事始めではないか。
- (2) とくに、野山の獄中における松蔭の行動。これ、絶望の中に最大のチャンスを見出す。まさに、教育の極意ではないのか。松蔭が、彼自身の哲学を創造して真に偉大になったのは、獄中における歴大な読書と沈思黙考である。
- (3) 松蔭が真の教育者として大成したのも獄中である。松蔭は、すべての人に捨てられた獄中絶望の人に、その長所を発見し、日本有為の志士を発見して狂喜雀躍させた。
16. (1) 松下村塾の理想的教育は、あまりにも有名である。が、最大の教育は彼の刑死である。松蔭は率先して君国のために生命をささげ、弟子達をして筆を投じて革新に挺身殉難せしめ回天の大業をなさしめた。
- (2) 松蔭精神は、士規七則と松下村塾記に結集されている。これまた、国定教科書には見当たらない。
- (3) 松蔭精神とその根底をなす崎門の学、素行の学、水戸学を日本の指導者(例。松蔭の弟子の元勳)がすてたことにより日本の教育は枯死していった。
17. (1) 国民が生命をかけて守るべき根本規範は死に至る病に冒された。政治家とジャーナリストは、後継者が育たぬまま、次第に死に絶えていった。

(2)この条件下、米軍による日本歴史抹殺計画は、破天荒の成功をもたらし、日本人は魂抜きとなった。外国軍隊占領下で、一つのレジスタンスもなく、ナショナリズムが斃死したのは世界史に例を見ない。一人のジャーナリストも、切腹もせずに死刑もしなかったのも驚異である。かかる大人を見せつけられて、若者との交流は完全に断たれた。

(3)松蔭精神が奇蹟の復活をとげないかぎり教育のエイズが発症して日本が死ぬ日は近い。日本は社会の木鐸をもたぬまま、風にそよぐ葦より情けない存在となった。

P288 ~ 294

18. (1)松蔭は、「日本とは何か、規範(倫理道德)とは何か」を、昼も夜も、声高らかに説いて、誰も彼も、泣いて感動させた。
- (2)「日本とは何か、規範とは何か」ということを教えてくれた人なんか、この時代、ほとんど絶無に近かった。
- (3)この時代の教育でも、このことを教えてはいなかった。

19. (1)そうすればどんなことになるのか。
- (2)「日本とは何か」を知らなければ、日本人は、日本と同一化(identification)をすることができない。
- (3)そのために、アノミーが出現して、心の拠り所を失って虚脱(心臓が弱って死ぬような)状態になる。
- 心理的に、これほど苦しいことはない。
- ひとは、藁にもすがりつく気持で、何にでもすがりつくであろう。

20. (1)「規範とは何か」「倫理道德とは何か」「何をすべきであり、何をすべきでないか」これを教えることこそ教育の根本である。
- (2)これを教えないと、どういうことになるのか。
- ひとは、「なにをなすべきか」が分からなくては、途方にくれる他はない。
- 五里霧中なのである。
- (3)人もうらやむエリート医者でも、受験をめでたく突破してきているとはいうものの、規範教育が全くの空虚であった。
- (4)何をすべきで、何をすべきでないか、こここのところが分ってはいなかった。
- だから、「これをしろ」「あれをするな」とはっきりと命令されると、コロリと参ってしまう。
- 規範が全くの空白なんだから、必ず、こういうことになる。必然である。

21. 教育の事始めは、規範(何をすべきであり、何をすべきでないか)にあり。

P86 ~ 87

<コメント>

吉田松蔭の教育こそ日本の教育の原点の1つと考える小室直樹先生の教えに学ぶところは多い。是非、このような考えもあるという観点から参考にして頂きたい。

2019年2月22日(金)林明夫